芸振

大分県芸術文化振興会議会報

県美術特集号 NO.3 45.11

発行所・大分市大手町 県教育庁社会教育課内 県芸術文化振興会議事務局
発行人・米田貞一 編集人・田村卓夫

美術館はいつできる

宮崎 豊

芸作術品は発表しなくてはなりません。発表など気にもかけずに、ただ一途に制作しているような変った作家でもその作品はいつかは人々の目で見てもらわねばなりません。即ち芸術家は何かの方法で発表の場をつくらなくてはなりません。そして多くの人々に自己の主張を表現した作品をみてもらわなくてはなりません。大分県美術協会展もその他の多くのグループ展も、そして年ごとにふえてゆく個展もみんな発表の場であります。ここで人々に作品を見てもらい、何かを感じてもらい、評価をしてもらい、話し合い研究し合うのであります。

現在大分県には県美協の全員 490人以外に一般の方々や県美協に属していない方々を加えると相当な数となるでしょう。大分県における美術人口は質・量共に他の芸術部門よりも勝っているといっても過言ではないと思います。

芸術活動はあくまで自由でなくてはなりません。県美協に全く関係なく他の方法で活動精進をしている人々も多いと思いますが、それはそれなりに結構であると思います。要はこの大分県に住み、大分県の美術文化を築きあげ、県民と共に美術文化を高めていくことであると思います。

県美協では特に県民が美術を味わう幸福が得られ美術人口がふえ、美術に対する関心が高まっていくことを心から望んでいるのであります。

しかし現状はどうでしょう。例えば県美協の場合、日・洋・彫・工・書・写の6部がありますが、これを一堂に同時に発表する会場がありません。実に貧困な施設しかない大分県であります。これは政治行政がいかに文化に対して冷淡であるかの現れと思われます。日本は最近経済的に急速な立ち直りをみせ生活は安定してきました。その結果として、いまほど人々が芸術を味わおうとする意欲に燃えている時はかってないのではないでしょうか。忘れられていた芸術系統の学校がとみに繁昌してきたり、町々に芸術的催しもあわただしくふえてきました。

こうした時、何としても県立博物館の建設は必至となってきます。期成会があれだけの努力を払って多額の寄付金を集めても県は未だに建設に踏みきっていません。貴重な美術文化財や歴史ある大分県内の美術作品を常時展示して鑑賞することが出来る美術博物館を考えるだけでも心のおどる思いがします。このためには県美協は出来るだけの協力を致して来ましたが、またこれからも致したいと思います。そして美術博物館は生きている美術館でなくてはなりません。そのためには現代の新しい美術の特別展などを十分やれる展示ホールが必要です。

堂々たる会場で堂々たる展覧会を開き県の美術文化を高め、一方若い意欲に燃えた新人の登龍の足場となりたいのであります。

（県芸振会議副会長・県美協会長）

実現するか 人間国宝 生野祥雲斎竹芸展

42年3月、県人として初めて国の重要無形文化財に指定された生野祥雲斎氏の竹芸展が今年の県芸術祭主催行事として予定されていたが、つごうで延期となった。ところが最近、関係者の間で再度話が進められているということで来年の秋にはいよいよ実現するのではないかと思う。

国際的にも高く評価されている竹芸の第一人者である生野芸術の全ぼうがどの様に開かれるか、大いに期待したい。

（写真は作品を創る最近の生野先生）

県民文化の発展に寄与する県美協

仲　町　謙　吉

Ⅰ　県美協の現況

Ⓐ　組　織

・（会長１）宮崎豊・（副会長３）進来哲・平田陽邨・糸井英雄・（事務局長１）仲町謙吉・（事務局次長３）菅久・山口九碩・大崎聡明・（委員46）＜日本画＞小野一郎　▲田川奨・南光雄・宮崎武夫・＜洋画＞安藤真・江藤明・岡部忠之・片山一・神田千里・木村成敏　▲熊井淳・高橋正・武田由平・田中昇・寺司勝次郎・十時良▲浜田九一郎・脇坂秀樹　＜彫刻＞岩男順　＜工芸＞上野博司　▲檜原長甫　＜書道＞▲安部遊雲・上田有圭・内山晴嵐・狩生東海・後藤白草　▲首藤春草・野田南圃・松村三舟・三浦佐邨・森神紫陽・山本陽庭　＜写真＞阿部一晴・阿部光宏・池永良彦　▲浦野進・岡田季幸・北新藤市・今井正男・佐藤光彦・橋迫爽　▲三重野元・吉尾留尾・（常任委員９）上記▲印　・（監査委員３）小野昌一・下村勇峰・上島彬・（会員 490）日本画33　洋画169　彫刻５　工芸９　書道159　写真115　・（名誉会員18）日６、洋７、工１、写３、書１・（顧問28）・（客員31）日８、洋13、彫４、工２、建築１、評論１写１、書１・部門は日本画・洋画・彫刻・工芸・書道・写真の６部門となっている。

・会員は、県展４回以上入選していて、会員３名以上の推薦が必要で、各部門の委員会によって決定された者となっている。たいへん厳しい条件・資格が必要である。

Ⓑ　運　営

(イ)　部門ごとの自主的な運営が基本となっているが、対外的には一体化した形で行なわれている。

(ロ)　経費も各部門で収支決算をしているが、総額約250万で　内訳は、会費・出品料・入場料・県費事業補助金（60万）その他である。

(ハ)　会議、各部委員会が各部の事業等の企画、運営にあたっている。しかし総会が中心で規約の改正、役員の選出、事業、会務等の報告を行なっている。各部を総合した中心会議であるが、常任委員会が通常的なことは連絡し協議している。事務的な事項は、次長会で執行し、円滑に運営されている。

Ⓒ　事　業（昭和45年度分）

(イ)　県美協の主体的事業

１．第６回県美展・例年秋に開催している公募展で、中央より審査員を招へいし盛大に催す。賞も文部大臣賞をはじめ多数である。

２．春季展（日、洋、彫、工部）特に今年はアンデパンダン展をやめ、賞を出して意欲的な展覧会とした。

３．ヌードによる絵画講習会（日洋彫工部）大阪よりモデルをよび建設会館ホールでこの夏に催した。数多くの人々が熱心に研究し一週間の成果をあげた。

(ロ)　他団体との協力事業

１．模写による国宝壁画展、県美協としては、企画、運営に協力、又前売券の販売等を推進、多くの鑑賞者を集め大好評であった。

２．県芸術文化振興会議、ここでも中心的な団体であり、副会長、理事数名、事務局次長をつとめ県文化の向上発展と文化団体の親交に尽力している。

３．県芸術祭では実行委員会の主要な位置、議長、副議長などその発展に尽している

４．県立美術博物館建設期成会には、副会長、理事、事務局長と重要な役割を果し、その推進の中心となっている。

５．文化財保護等にも積極的に各地の委員が活躍している。

６．県内の各美術展に協力

各地市美展等の運営や協力、県労美展、竹田美術祭高文連美術展等の振興に尽している。

Ⅱ　今後の課題

Ⓐ　運営に関すること

(イ)　経費の増額

１．民主的民間文化団体としてその性格を堅持していくためには先づ会費の増額、

２．県費による事業補助の増額

３．その他の収入源を考えその増額を計る

(ロ)　事務機構の拡充

１．事務分担を現情よりどのようにして軽減するか。

２．完全統一体になったときの事務機構をどのようにするか。

３．県社会教育課の拡充による事務機構の拡充……文化課の新設による文化予算の増大と、政治的施策の充実、文化施設の新設と円滑運用策を考えなければならない。

Ⓑ　質的向上に関すること

(イ)　新人の伸展策をどのようにするか

(ロ)　九州ブロック等他県との交流をすすめたい。

(ハ)　本県展の独自性の開発をしなければならない。

Ⓒ　対外的事業の進展に関すること

(イ)　美術博物館の早期建設に努力し、発表の出来やすい場を確保する。

(ロ)　文化財の重要性、及び文化的生活環境への提言をどのようにすすめるか。

（県芸振会議理事・県美協事務局長）

日本画

後進養成が責務

田　川　奨

第二次大戦直後は長い間押えられていた個性が一度に爆発したかのように、あらゆる芸術の中に心の糧を求めて活動を開始した。その当時、県美協の再発足によって日本画壇も大分の牧歐堂、溝辺有巣、別府の河村李軒、古庄九汀、竹田の草刈蕉谷佐伯の衛藤晴村、杵築の田川豊山等々多くの指導者を得て若手の日本画作家が各地方から続出した。ことに大島桃山を中心とする竹田地区、宮崎衛を中心とする日田地区、正井和行の緑丘高校を基盤とした別府地区、田川親子を中心とした杵築地区からは新鮮な作品が常に発表されていたがその後宮崎衛が北海道に去り大島桃山が他界し正井和行が京都にひきあげてからは、杵築を除いて日本画壇も低調になり中津、佐伯、臼杵がこれに代り、優れた作家が現われるようになった。この頃福田平八郎先生の指導を得て大京美術院が生まれ東京、京都、大分県を結ぶ唯一の日本画展として画壇に漸新な風をおくり込んだがこれも数年にしてその影をひそめてしまった。事情は何であるにしろ中央の新風を低迷していた県内に吹き込んでくれたものだけにおしまれる。以後数年を経て県美協が美術写真書道と統合して第一回展を開く前後から、溝辺有巣、衛藤晴村、小野一郎、宮崎武夫、南光雄、田川等の指導による新人が輩出し、日展の正

井和行が県美展審査に来県されたのを期にして氏の助言を得て県日本画展を開くことになり、年々行なうその研修会が効を奏し安部マユ子、鈴木忠実、宮崎喜恵が中堅の位置をしっかりと占め、同時に京都美大の卒業生からなる今村文二、首藤詔子を中心とする美大ＯＢ組が技を競うことになり、ここにやっと往年の日本画におっつき、おいこしの感がして来た。なお、中央では福田平八郎先生始め高山辰雄、正井和行、岩沢重夫の日展の第一級組、院展の池田栄広、新制作の木下章等が健在でいつも立派な作品を見せて頂けるのがありがたい。

日本画は材料の入手、技法等で一応の指導が必要でこの点県内では指導の機関が少なく後進の養成、日本画の隆盛に困難をきたしている。大分大学では日本画の講座が設けられて基礎技法の指導はなされているが未だ作家を送り出すまでにはなっていない。県内には全国でもめずらしい芸術短大があるので、ここに日本画科でも設置し後進の養成に努めれば必ずや美術振興の一翼をになうことが出来るのではなかろうかと思われる。

（県美協常任委員）

洋　画

活発な現代派

進　来　　哲

現在県内で洋画の仕事をしている人は他のジャンルよりはるかに多く、県美術の中心勢力になっている。このことは大分県だけでなく日本全国の傾向で、絵画における基本的なものの見方、考え方がここから出発しているといってもいい。

さて大分県にとって今日ほど美術の盛んな時代は過去になかっただろう。春秋の県美展の盛況さ、グループ展の中心勢力である九州国展や七人の会展、また毎年三月に開かれる労美展。大分市や別府市など各市で催される市美展、その他大分市内では毎週どこかの会場でグループ展や個展が開かれているが、これらのほとんどは洋画の仕事をしている人たちによって活発な制作や発表がされていることは周知の通りである。

そもそも大分県洋画界は片多徳郎からはじまり、そのくん陶を受けた権藤種男、菅一郎、保田善作、江藤純平などいわゆる官展系と美校時代片多と同級でヒューザン会で活躍し、のち大分中学の教師をした山下鉄之輔の教育を受けた、佐藤敬などの新派と、戦中戦後派を含めた現代派の三つに大別できると思うが、その中で現県洋画壇はなんといっても現代派の時代である。しかしこうしたはなやかな県洋画壇を推進してきたその陰には上記大先輩の他に美術教育者としても大きな足跡を残している版画家の武藤完一、武田由平両先輩、そして戦後県美協の復興と運営に地道な仕事をつづけてきた宮崎豊現会長の存在も忘れることはできない。そしてこの多くの大先輩が培った土壌から群生した戦後の県画壇はまことに多彩である。

まず現代派の傾向をみるといわゆる中央画壇とつながりをもった画家が一番元気がよく、県内外でも意欲作を発表している。なかでも一番出品者数の多い国画会は毎年九月、九州国展の名称で公募展を催し結束がかたい。またつぎに多いのが東光会。この出品者も豊光会という展覧会を開いて研究が活発である。その他自由美術、二紀、光風会とつづいているが、一年間東京都美術館で開かれている大きな美術団体展のほとんどには県下からの出品者があるといってもいい。しかし中には中央展にみきりをつけて、コンクールで勝負するもの、グループ展や個展で仕事をしようとするものなどいずれの地も同様である。

つぎに傾向であるが上記団体展の出品者の多少によってその県の作品の方向を知ることができるのであるが、本県の場合、若い画家のほとんどは保守的なものよりモダンな仕事に流れているといっていい。毎年久留米の石橋美術館で開かれている西日本新人展をみれば本県の仕事がどんなものであるかわかるだろう。そして、これら大分県の仕事がこの展覧会ではほとんど受賞してないのはなぜか、最近は中央画壇でもそうであるが、類型的なモダニズムが極端に敬遠されている。大分県におけるモダニズムの正体は一体何であるのか、大分県特有の個性とはどんなものなのだろうか。大分県という生活の中から生まれた絵画とはどんなものなのだろうか。

大分県の若い世代による選抜展のようなものができて、こんな問題を話し合えるようになればこれからの大分県にとっても大きな刺戟になるのではないかと思っている。大分県洋画壇も相対評価すればまだまだ他県に及ばない。自己研修と同時にもっともっと活発な発表の場とチャンスがこれからはほしいと思う。

（県芸振会議理事、県美協副会長）

彫　刻

素地はあるのだが

岩　男　　順

他県でも同様のことだが、中央から離れたところで、彫刻をする人は至って少ない。彫刻をするには、場所と、廻転機、心棒、良質の粘土等を必要とする。場所といっても、粘土を扱うのであるから、相当によごれるし、かなりの重量に耐える床がなければならず、座敷などでは、とうてい出来ぬ。その上、成型には、専門的な技術を相当に必要とする。

これらのことから、県展出品者も、大学の美術科等の、設備と場所のあるところに籍を置く学生諸君や教師が中心となり、一般的に、日曜作家の趣味的な制作とは、およそ縁遠いということになる。

従って、県内の彫刻家等という大げさな標題では、書けそうにもないという実態である。

それでも、大学の学生諸君の中には、なかなか優秀な人がおり、古内紳君は、二紀会に入選した。会員の北野隆士君は新制作展に入選している。下毛郡の深水元伸君は、なかなか才ある人で、よい作品を出品していたのだが、ここ一、二年沈黙している。今までに、彫刻部門で受賞した人の中で、石和リィ・工藤忠義君等がよい作品を作っていた。石和君の如きは、このまま続ければ、大した彫刻家になると思っていたが、やめて了っ

中央美術団体に所属する県在住洋画家

（光風会）<会員>熊井惇、進来哲、仲町謙吉、武藤完一（国画会）<会員>岩尾秀樹、宇治山哲平、長野静司<会友>松野良治（ＪＡＮ）<会員>広瀬通秀（自由美術）<会員>神田千里、十時良、山崎芳直、脇正人、日名子金一郎（新槐樹社）<会員>江口清博<会友>中野靖子、佐藤美智子（創元会）<会員>三浦直政、脇谷護（太平洋美術会）<会員>森川豊川（東光会）<会員>大平敬次郎、岡部忠之、脇坂秀樹<会友>松尾哲臣、後藤賢一（独立美術協会）<会員>広瀬通秀（二紀会）<同人>菅久、菅玲子、古川栄（日本美術会）<会員>木村成敏、北野輝、中沢とおる、佐藤公春（白日会）<会員>武田由平、寺司勝次郎<準会員>松本小十郎<会友>花崎宏志（モダンアート協会）<会員>宮野蔵人<会友>若杉健一（日版会）<委員>武藤完一、武田由平<会員>寺司勝次郎（一線美術会）<会友>小川裕（日本水彩画会）<会友>高橋正（アート・クラブ）<会員>宇治山哲平（美術文化協会）<会員>末永要

た。工藤君は、芸大大学院に進み、中央にあって彫刻の勉強に専心している。

かって抽象的な作品を出品していた新名隆君も多摩美大を出て、行動展の会員となり、中央にあって活躍している。その他南郡にいて、基礎的な技術もしっかりしていた甲斐勝美君などいま、どうしていることか。大分郡に森真一君、園田俊一君、大分市に広田肇一君等がいたが、最近は出品したことがない。

県内には、日本美術史上に有名な磨崖石仏があり、朝倉文夫先生の如き、大彫刻家も出たのであるから、今後、若い人々の中から、立派な彫刻家が出ることを、深く期待する。

（県美協常任委員）

工　芸

後継者のないのが悩み

楢　原　長　甫

工芸と一口にいっても各分野と各々素材の異るものと多種多様であるが、先づ美術工芸と産業工芸に大別できる。ここでは美術工芸を取りあげて見る。この中でも陶芸、染織、漆芸、金工、木竹工芸など分かれ各作家はそれぞれの素材をいかに美しく物に表現すべく精進している。ここで本県では残念ながら作家の数は極めて少なく今後もあまり期待出来そうにもない。一考を要す問題だろう。

竹産王国といわれる本県も産業工芸というかその方面が好況で創作活動へは手が廻らぬ恨みがある。いうまでもなく竹工芸では本邦第一人者生野祥雲斉先生がおられるがあまりにも頂点が高く二、三意欲的な作家はいるものの底辺が狭い。近時若い人たちが真竹会という研究グループを作って勉強していると聞いているがたのもしい限りで一日も早く成果を揚げてもらいたいもの。

県下の工芸界で優秀といわれたものに日田の漆芸があるが資材や工具の欠乏と技術の修得に長年月を要するなど悪条件が重なって後継者が育たず現在数名の作家と技術者十数名で細々と続けているがみんな高齢で自然消滅の運命にあることは惜しみてもあまりある。

最近染織を志す人も漸次増加しつつあるが良き指導者に恵まれず伸び悩んでいる様だがお互い研究し合いがんばってやるべきだろう。

陶芸では日田に小鹿田窯があるが、さきに述べた美術工芸や伝統工芸とは程遠いがこれはまたこれとして民芸窯に徹して欲しいと思う。

最後に本県出身の工芸家の人たちを列記して見ると陶芸で日展委員の河合哲徳氏、漆芸で光風会会員の武石勇氏、弟の河合匡造氏（日展委員）両氏の母堂で創玄会々員の武石静江女史、同じく日本工芸会々員の山永光甫氏など中央工芸界で活躍していられることは誠に心強く県在住の作家も後に続くよう努力しなければならないと思う。

（県美協常任委員）

書　道

鳴　鶴　に　帰　れ

平　田　暘　邨

大分県美術展（書道展）も回を重ねること6回。その成績は年とともに向上して県書道協会時代の県展作品と近年の作品とは比較にならぬほど進歩したことは誰しも認めるところであろう。昨5回展に中央より聘した審査員も本県展の作品は中央のそれに劣らないと評していた程である。先づ結構な次第であるが、私は県の有識者から次のような批評を聞いて非常に愧ぢ入り且つ反省させられたのである。それは、大分県の書道は、球団のユニホームだ。というのである。即ち、その地方の師匠の書そのままだというのである。その作品を見れば、どこの誰先生の社中だとはっきり判るというのである。

この現象は中央展でも同様であって〝類型的作品〟との悪評をよく耳にするところである。中央でも然りであるから地方はまして然りであると諦めてよいであろうか。

思うに初心者は「創作」の労作は非常に難事である。半紙にお清書をして、いざ展覧会出品となると画仙紙に作品を作ることは容易のことではない。更に自分の書を創作することは殆んど不可能なことかも知れない。申すまでもなく画仙紙に創作する労作は書道最高の仕事だからである。

さりとて何年経っても師匠の手本がなくては作品が出来ないでよいだろうか、書を学ぶ者の段階は、しばらくは師法に育従し、次で古碑法帳の研究に入り、用筆、運筆に習熟し、諸法帳の姿態、筆意を会得した後、それを基礎として懸命に自分の書の創作に専念すべきではなかろうか。最近の書道界で往々にして流行の書風を追い天下通用の書と誤信する向きはないであろうか、個性を過信して一人よがりになっている書人はないだろうか。要は古典に立脚し、歴史に照らして、亡びない書を習い一家をなす、にありと私は確信する。

県展書出品者に真の創作者の続々出現することを切望してやまない。

巨匠日下部鳴鶴翁は、門人に対し熱心に且つ厳格に指導したが出展作品の手本は与えなかったと聞いている。宜なるかな鶴門は、そうそうたる大家が簇出した。最近本邦書道界において「鳴鶴に帰れ」という声を聴く、大分県の学書者諸氏！導く者も学ぶ者も、改めて一段の考慮をはらい、益々精進しようではないか。

（県芸振会議理事・県美協副会長）

写　真

共同制作「大分県の姿」を計画

糸　井　英　雄

県美協写真部の前身である写写真作家協会が設立され、その後美協の一部門となって十数年が経過した。

結成の目的は、県内各地に散在する写真の愛好家が互いに交流をはかること、作品を発表する場を持ち新人の発掘をすることにあった。

まず、作品発表の場として県展が開催され、これは年を追って盛況になってきた。その原因は審査制度にあったと思う。第1回以来、緑川洋一・植田正治・林忠彦・秋山庄太郎・長野重一・伊藤逸平とわが国トップ級の作・批評家を招いて公開審査をしてきたが、出品者にとって自分の作品を見てもらえることと、厳格・公平な審査が県展への信頼と評価を高くしたものと思う。

乏しい協会の財政から、これらの作家を招くことは負担が重いのであるが、県展は今後ともこの制度を続けたい。

会員や出品者は県展までは良い作品を出すのであるが、全国的な公募展・コンテストで大分県勢が振わないのはおかしいと思う。県展のレベルは九州では最右翼であり全国的にもA級と思われるのに、県展以外に熱意がないかに見うけられる。大分・宮崎の両県は九州の裏街道と呼ばれ、写真不毛の地と見られているのは残念である。力量のある作家は多いのであるから奮起を望みたい。

東京をはじめ全国各地で個展や同人展が相次いで開催されているが、当地では少いのは淋しい。一つのテーマを永年追求している作家が少いのか、魅力のあるテーマがないのだろうか、

この点も消極的な県民性が出ているのであろう。わずかに大崎聡明氏や豊後高田の佐藤氏を中心としたグループが、大分県の文化財や国東の文化遺跡をとりあげたのが記憶に残るだけである。

写真展の全経費を全部自己負担とすれば、百点の場合まず百万円を軽く超す、従ってよほど資力のある者以外発表できないことになる。東京の場合のようにメーカーの援助がない地方都市での個展の悩みはここにある。

それで、県美協全会員による共同制作写真展「大分県の姿」を近い将来計画したい。

これは躍進する産業と県民生活。観光や農村の疎過等、大分県の問題点をカメラでとらえ県展と共に考える展覧会である。

県芸術祭の主催行事としてとりあげたいものである。

（県芸振会議理事・県美協副会長）

あすの大分をデザインする

波多野義孝

たち遅れている県下グラフィックデザインの分野をなんとか先進地の水準までもってゆきたい。それと同時にもっともっとデザインというものを大衆に啓蒙しょう！この一念に燃え、有志が幾度となくグループ結成の下話しを重ねた結果、やっと呱呱の声をあげたのが昭和三十五年の秋、それが現在の大分県宣伝美術会、＜大宣美＞である。

ちょうど今年で満十年、会員数も数十名に達し発足当時の五倍にふくれた。年二回の展覧会、つまり春の会員展、秋の公募展が中心活動になっている。

ご承知の通り戦後経済の著しい発展に伴いデザイン需要も必然的にその度を増し、日常生活においてもやはりデザインを無視しての生活はまったく考えられない今日である大量生産、大量消費の時代、店頭には種々真新らしい商品がうず高く積まれ、また家庭においてはテレビその他情報媒体による商魂たくましいCM合戦が展開、いやがうえにも視覚的感情的にナイズされている。まさにデザインに明け、デザインに暮れる昨今である。めまぐるしくハイスピードで変ぼうする環境、そんな今日我々グラフィックデザイナーに課せられた〝つとめ〟、それは簡単に口舌では表現できるものではない。特に何かにつけ不利な立場にある地方デザイナーにとっては真剣に考えさせられる問題点が余りにも山積している。グラフィックデザインは産業と結びついて発展してゆくものであるから、弱小経済力の地方では日常優れたデザインを手がけるチャンスに恵まれず、たまの需要に応えるだけの充分なウォーミングアップに不足している。

しかし悪条件ばかりではなさそうだ。「大分の夜明け」ともいうべき、臨海工業地帯造成による大平企業の進出で遅ればせながら大分のすべての市場に活気が見えはじめたからである。成長を遂げる大分の経済に比例して、我々コマーシャルデザイナーもますます力をつけなければならない。現在時点での広告の仕事というのは大変なもので、一人や二人の個の才能ではどうにもならない。巨大な対象であるということ、クライアント側の要求がすごくシビアになったこと、その要請に対応できるだけの洗練された完成度が当然デザイナーに要求される。

ときがときだけに我々も時代の潮流に遅れをなしてはいけない。対応できる態勢づくりに精進しなくてはならない

大宣美会がそのよき中心母体となり健全な姿で大分県デザイン界の水準高揚のリーダーシップをとり「あすの大分をデザインする」をモットーに広く地域社会に貢献したいものである。

（県芸振会議理事・大宣美会長）

大分県宣伝美術協会役員

会　長	渡多野義孝	委　員	武口　春利
副会長	新名　竺	〃	曳沙　定道
事務局長	園田　英雄	〃	増田　莞爾
委　員	阿部　成美	〃	坂本　韶敏
〃	久保喜久真	参　与	坂本　昌久
〃	荒木　清旨	〃	稲富喜久男

全国いけばな界の旗手

津崎一石

いけばなの家元が全国で２千数百、いけばな人口が全国で１千万は下るまいというはなやかな現代から思えば、まるで悪夢のような戦後の混乱時代であった。

当時の大分県の華道界は、自分の所属する流派以外の華道人との交流はほとんどなく、他流人同志が街中で行きすれちがっても、あいさつを交すことすらまれなくらいすさんでいた。

これは敗戦による人心の廃頽によるものだけでなく、戦前における華道家元の経営者たちが、まったく排他的で、異流との交流はもちろん、他派との共同花展などは極端に避け、その自流独善主義傾向の悪習慣が尾を引いて諸流の結集や共同花展などの実現を困難なものにしていたものと思う。

そのうちに世相がやや落ちついてくるにつれて、華道家たちにも、いけ花をもって人心の平静化に一役買いたいというものが諸流の中から相寄り相集まり、機をみては諸流の交流団結をはかり華道展などを催してはいけ花運動に取り組むようになってきたのである。

その頃はまだ物資もとぼしく、華道展会場の設備などになみなみならぬ苦労をしながら、こうした不自由な中で他流との親しみを深めることに努力したものである。

昭和38年いよいよ時機到来、念願がかなってその春に、大分県華道協会が誕生した。これは大分県全域にある諸流派を背景として県内に在住する華道家ならびに華道愛好家をもって組織し、個人加入の形式をとり入会者を募集した結果、県下諸流11流派 800名を越す盛況であった。この創立記念としてトキハデパートで第１回華道展を開催したのである。

このように全県下の諸流華道家がもれなく参加し、華道愛好家をも抱含したものは、当時では恐らく全国でも類をみないことであり、全員一同堅く手を握り合って、この結成を祝福しあったものである。

それから約10年、 機を得ては講習会や展覧会をつづけ、 心技の向上につとめ、 初期の目的に向って邁進してきたのである。

この華道協会は前述のように世相の事情により個人入会の形式をとり、その所属する流派から代表者を選出して、運営委員会を設け、これが協会の運営に当たってきたのであるが、ますます大世帯となるにおよんで、事務局は、嬉しい悲鳴をあげているのが現状である。

そこで今後この協会の発展向上を考えるためには、まず組織の合理化と事務の簡素化をはからねばならない。躍進への四辻に立たされている現在、以上のような問題を早く改善して、諸流の華道愛好家とが一丸となって名実ともに県をあげての華道協会にしなければならない。そして、その花道は目前にひらけていると思う。

こうした県下総結集の華道協会は、恐らく全国でも大分県のみのもので、この大いなる団結の力により、全国の華道界に斯道躍進の警鐘を鳴らし、わが国いけばな界の旗手たることを自任することができるのではないかと思う。そして県下における

日常生活に密接な関係のある文化団体として、県の文化行政の一端に大いに貢献することが期待できると思われる。

（県芸振会議理事・県華道協会常任委員）

大分県華道協会役員

（名誉会長）岩崎貢、（会長）空席、（委員長）藤田昌嗣（常任委員）津崎一石、（事務局長）山本益樹、（会計）秋月絹枝、（委員）各部代表者　<池坊>春山房子、榊松枝、岡村静子　<小原流>瓜生超、森川橋月、吉田テル子　<草月流>寺司美泉　<専正池坊>津崎一石、阿部華水、木村探月　<悟自然流>池田力、姫野さかえ　<本能寺未生流>徳丸寿甫、河室静甫　<本能寺未生流>藤衛光甫　<嵯峨流>羽田翠甫　<未生流南宗>高並延甫　<先家>佐藤正晃　<栄心>平川瀬雨　<南宗流>藤野松鶴　※以上は38年創立当時の役員であるから現在では消息不明または死去された方もある。「芸振」第１号の県芸振参加団体名簿には瓜９に「大分県諸流会」とあるが誤りである。正しくは「大分県華道協会」と訂正いただきたい。

第六回県美展終わる

今年の審査について（日・洋・彫・工展）

菅　　久

今年の県美展、日洋彫工展には京都の国立近代美術館長である河北倫明氏が審査員として来られたが、河北氏は日本画から彫刻・工芸に至るまで、すべての部門にわたって鋭い見識をお持ちであるということから日本画や工芸などの年輩の方々も洋画の若い層も非常に人気があってその動きが期待されていた。

その結果、期待に背かず、最も正当な線が出されたのであるが、今回の観点をクローズ・アップしてみると数多くの作品を決めていく時、その基準になる線があくまでも内容にあったということである。これは絵を描く者、芸術をする者として当然考えられていることであるけれど、ややもすると技巧・技術や表現方法の新しさなどに目がうつり、芸術としての創造が形式を強くみることに動かされていく場合が考えられる。この点河北氏はハッキリと、しかも厳しく一線を引いた点が注目された（これは現代の強い傾向である）

だからある意味では下手な絵が入選して、うまい絵が落選をしている結果も出ている。会場を廻ってもやや泥くさい、労美展や高文連の美術展をみる様な平凡な作品も数多かった。そしてその絵には下手でなければ出ない、あるいは下手だからこ・あるほのぼのとした暖かさ、愛情、まじめさ、祈りの様なものが感じられ、いろいろと考えさせられ思い知らされた。

しかし河北氏も言っていたが、美術というものは展覧会や美術館のためだけにあるのではないので、展覧会で落選したからといって、そんなに心配することもないし、入選や受賞したからといって有頂点になることもない。一つの判断として、これからの仕事を進める資料にすればよいと思う。

ただ、こうしたせまい会場のため一般出品は多が落選という厳選になってしまったことは大変気の毒なことで、ただただ申訳ないの一語につきる。こうした中で会員であるがためにのうのうといいかげんな作品を出品している者がいるとすればこういう批判に対しては、会員一人一人が自己反省すると同時に会の問題として運営の面からも考えなければならないいろいろな点がある様に思う。

（県芸振会議事務局次長、県美協事務局次長）

消息

宮崎豊県美協会長

・受賞　○45年度大分合同新聞文化賞　11月３日　大分県文化の発展に貢献した人々に贈る大分合同新聞文化賞の受賞者５氏が決定したが、その中で県芸振会副会長県美協会長宮崎豊氏が、地方文化賞として、戦後21年、県美協の結成に努力、18年間事務局長、委員長を勤め、美協が書道、写真と統合後は会長として県美協育成しまとめ役に尽力したその功績に対して受けたもの、東京美校卒、大分大学講師、別府女子短大教授、挾間町出身、67歳。

○東光会奨励賞　第36回東光展（４月）に出品した佐藤京子氏（大分市）は人物で受賞、同展で受賞２回目

○新構造社展クサカベ賞第42回新構造社展（６月）に初出品した有本尊氏（大分市）は花による作品が二点入選しクサカベ賞受賞。

○二紀展褒賞　第24回二紀展（10月）に初出品した山川公丈氏（大分市出身・大阪在住）が土葬シリーズで二点入選、受賞した。

・日本画院委員に推挙（５月）弘永きぬえ氏（中津市）

・新興美術院会員に推挙（６月）安部マユ子氏（山香町）

・日本工芸会準会員に推挙（３月）第17回日本伝統工芸展入選（９月）檜原長甫氏（日田市）

・自由美術協会会員に推挙（10月）日名子金一郎（大分市）

・画廊・キムラヤ画材店では目下店舗の左隣に画廊を建築中、12月には開店の予定。

・バレエ公演「眠れる森の美女」東京シティバレエ団、11月19日（木）よる6.30 大分文化会館、一般900円、小中高生

・交響楽団来演〝東京フィルハーモニー〟来年１月26日、くわしくは大分市都町２丁目６－４　大分労音　ＴＥＬ④9398へ

第二回九州地区芸術文化振興会議「特別講演」

朝のこない夜はない

評論家　扇谷正造

私の朝日新聞最後の仕事は論説委員であったが、この長い新聞社生活の中で吉川英治先生からはいろいろなことを教えられた。

まず先生の祝句に新郎新婦の両親におくる句がある。

「菊つくり、菊みる時はかげの人」次に若い二人におくる句「菊根わけ、あとは自分の土で咲け」

結婚式のスピーチは短いほどよい。七分～十分ぐらいまで。NHKは一分間に三百字しゃべる。だから十分間に三千字の原稿をつくればよい。みなさんもこの句を覚えておくとよい。

夫婦とは凧と凧のシッポみたいなものである。うまくいかねばバランスがとれない。ある中年の女性がこの話を聞いて、自分の夫に「私は理想的な凧のシッポであるのになぜあなたは天高く舞上がらないの」と言った。ところが夫は「それは風がないからだ」と答えた。しかし男の顔には一生に三回風があたるとかいわれている。折角風があたってものれない人がいる。これはいつ風があたってもいい体制が夫婦の中でできていないからだ。

吉川先生から教わったもう一つに〝あいさつ〟がある。目と目を合わせたおじぎである。自分のこどもが学校に行く時も必ず目と目を合わせて「行ってこい」とあいさつする。見ていてひどくさわやかであるこれはこどもに対する句読点である。こどもはのびのびとさせてよい。父親が自分を愛してくれているというこの感得が本当の教育ではないかと思う。

秋田県で九十匹の熊をとったという猟師がいた。人間と熊と目を合わせる。ひるむすきに鉄砲を撃つ。ひとの話を聞くときは相手の目をみる。目と目の対決である。

「顔を直す」ということばがある。私は一週間に一度原稿をもらいに先生のお宅へ行く。徹夜した作家の顔はムザンである。昨夜の小説の主人公のことが、まだ顔に残っている。吉川先生は顔を直してもう一度出てくる。

〝無財の七施〟ということばがある。どんな人でも七つの施しをすることができる。その中の一番大きいものが顔施（スマイル）微笑を浮べることによって周囲の人をやわらかくする。そんなことを考えてアメリカの家庭に入ってみると。アメリカでもこれがある。それはプリーズ、サンキュー、エクスキューズミーを先ず最初に教え、その次に必ずスマイルを教える。特に女の子にはスマイルを教えるが、この笑いは、つくり笑いであってはならない。以上は人間関係の四つの潤滑油である。

〝ありがとう〟という言葉が素直に出るようになってほしい。ドウモ。ドウモという言葉があるが、あれは高橋圭三が犯人。岩手県の人はありがとうという時、ドウモ、ドウモという。近頃の若い人は〝ありがとう〟という言葉をあまり使わない。

NHKが美しい〝ことば〟を調査したが、峠、閑、辻こんな字は日本人のつくった字であり、私は美しいと思うが、NHKの調査の中では第一に〝ありがとう〟ということばがでて次に〝おはよう〟〝さようなら〟などがつづいている。この様に日常のことばが一番大切である。

「男が階段をのぼるとき、女が階段をおりるとき、足もとに提燈をともせ」。男が一番出世街道を行く時、女が暗く沈むとき最も足をすべらしやすいので注意せよという意。

木村名人は中盤戦になると、いつも小声で「マイッタマイッタ」という。その時相手は胸がドキドキする。その瞬間をみてコマをうつ。将棋は技術の勝負ではなく、人間の勝負である。盤外作戦を升田幸三が裏手に出て名人になった。升田幸三は兵隊にとられて満洲に行った。剣道はうまかったが、いつも銃剣術でやられていた。その時に呼気吸気の術を発見したのだ。

動物は息をはく時リラックスするが、息を入れる時、緊張する。この術で銃剣道一になり、この術でまた木村名人をも倒した。木村名人がゆっくり一服たばこを吸うそのはく息をねらってうったという。

吉川英治先生はこどもの頃父が倒産して小学校4年で学校をやめデッチに出て日給で病気の父と母と多勢の弟妹を養った。文化勲章をもらった日にこんな句がある

「菊の日、もう一度紺がすり着てみたし」

先生が亡くなって七年になるが、その本は一千万を突破した。明治から夏目漱石に吉川英治ぐらいであろう。どうして先生の本が多くの人に愛読されるのか、それには3本の柱があるからだ。

① 求　道

② もののあわれ

③ 骨肉愛

この三つは日本の国民的性格であり、そこに文学的共鳴があるからだ。

（おわり）

※二号、三号と二回にわたって連載した「朝のこない夜はない」は今年七月、八日、九日の二日間佐賀市で行なわれた九州地区芸振会議の特別講演を編集子が速記したもので、大体の内容とすじ書きである。

波紋

「芸振」の充実と普及に力を

狭間　久

大分県の芸術文化振興のために、関係諸団体が連絡提携しあう機関として、県芸術文化振興会議（芸振会議）の意義を認める人は多いだろう、ただ実際問題としては、いまの芸振会議で満足か―という点になると多くの人が首をかしげるのではなかろうか。芸振会議の存在があまりに影が薄く、あるようでもあり、ないようでもあるからだ。

しかし芸振会議は確かに存在する。会長もいるし、副会長、理事、事務局長…と役員はガッチリそろっている。では会員は…これが問題だ。会員として各種文化団体の名前が70近く列挙されている。団体参加である。だがこの〝団体参加〟ほどバクゼンとして、無責任なものもない一体、参加団体の個人個人で、「オレは芸振会議の会員だ」と自覚する人が何人いるだろうか。芸振会議という組織のトップの顔ははっきりしているが、下部にいくほど顔はボケてくる。頭あって、足なし、つまり幽霊みたいなものだ。芸術祭シーズンにヒューと現われ、シーズンが終わるとスーと消える―これがいままでの芸振会議だった。

だが、ことしになってこの幽霊が〝足跡〟を残し始めた。足跡とはほかならぬこの「会報」。芸振会議としては画期的なことだった。この〝足跡〟を大事にしたい。いやより大きな、より確かな〝足跡〟にしてほしいと思う。足が出た幽霊はもはや幽霊ではない。「芸振」によって芸振会議は実態のあるものへ進んだといってよい。

そこで今一番望みたいことは、「芸振」の充実だ。お決まりの行事案内的広報誌ではなく、県下で実際に活動している者、関心を持っている者の、実感あふれる意見なり悩みなどをどしどしのせてほしい。現場からの生きのよい血を吸い上げてほしいということだ。そのためには魅力ある編集が必要だが、幸い「芸振」２号で意欲的な編集方針が打ち出されている。これに豊かな肉づけをすればよい。それには会員の幅というか層を大幅に拡張することだ。「芸振会議にはこれこれの団体が加盟しています」式で、上品に構えていてはダメだ。会員とし個人を一県下の芸術文化を真剣に考え悩む個人を、どしどし捜し出して吸収することだ それにはまず「芸振」の配布方法をもっと検討すべきだ。一部何十円かで売ってもよいから、広く県民に「芸振」を浸透させてほしい。下からの盛り上がり、下からのエネルギーがいまの芸振会議には一番必要。それを触発し、吸収する場として「芸振」の充実普及に力を入れてほしいと思う。　（大分合同新聞記者）

編集後記

- どうやら第３号は計画どおり、11月に発行ができる。執筆いただいた方々のご協力を感謝。
- それにしても第２号は失敗であった。時期遅れのため内容に新鮮さを欠いだこと、印刷所のつごうでタイプになり、美的体裁をなくしたこと。校正の不行届きで誤植が目についたことなど、編集者として実に残念であった。今後はこの様なことのない様に十分注意をして期待に添える価値ある会報にしたいと思っている。
- 第３号から県芸振会議に望む「波紋」の欄を設ける。トップに合同新聞文化部記者の狭間久氏にお願いしたが、大変いいことを書いてくれたと感謝している。
- ということでまだまだ「芸振」の足跡は幽霊の足跡である。県芸振会議そのものは足もとよりも頭の方に気をとられて、顔の形や衣裳に思案中である。
- 立派な足跡を残す努力、大地に足を踏みつける姿勢、こんなことがいま一番考えなければならない大事な問題ではなかろうか。
- 平常活動に力を入れる県芸振会議、県民一人一人のための県芸振会議とは具体的にどんなものなのだろうか、またどうすればいいのか。
- 次号からは各方面の人々に登場願い、いろんな角度から忌たんのない直言をお願いする。
- ところで「芸振」８ページの編集など実際は大したことではないのかもしれないが原稿が集まらないのが困る。どうか依頼を受けた方は何とか反応を示してほしい。編集子も一日机について事務をしている仕事ではないので、合理的なスピーディーな仕事がしたい。どうか自分たちの「芸振」とお考えの上、ぜひご協力をお願いします。
- 次号は１月発行、県文芸特集となっているので関係の諸団体、個人はそのつもりでお願いします。　（S）